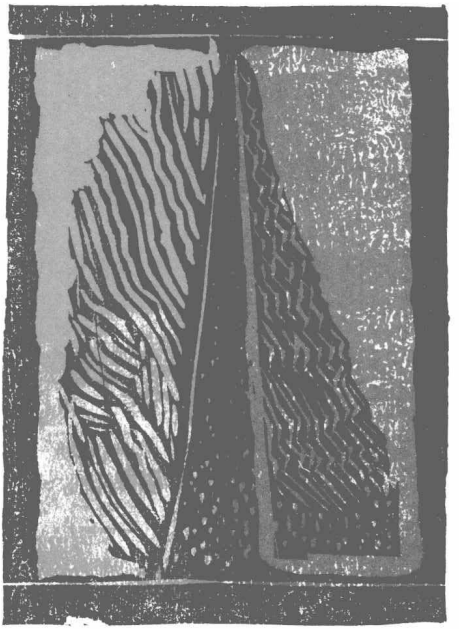
「救い主」が殴られるまで

燃えあがる緑の木 第一部

大江健三郎



新潮社

「救い主」が殴られるまで

——燃えあがる緑の木 第一部——

一九九三年一一月二五日　発行
一九九四年一一月二五日　四刷

著　者　大江健三郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号　一六二
電話　営業部〇三―三二六六―五一一一
編集部〇三―三二六六―五四一一
振替　東京四―八〇八
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Kenzaburô Ôe 1993, Printed in Japan
ISBN4-10-303613-3　C0093

目次

第一章　蘇りとしての呼び名　5
第二章　「童子の螢」　55
第三章　最初の説教　105
第四章　「転換」　155
第五章　森の力は恢復しているか？　199
第六章　Kaji という記号　243
第七章　「燃えあがる緑の木」　283

裴帧·司修

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

「救い主」が殴られるまで

――燃えあがる緑の木　第一部――

第一章　蘇りとしての呼び名

「屋敷」のお祖母ちゃんが、あの人をギー兄さんという懐かしい名前で呼び始められた。森に囲まれたこの土地で、新しい伝説となっている人物が再来したように。お祖母ちゃんがいったんそう呼ぶと、「在」でも谷間でも自然にあの人をギー兄さんと呼んでこだわりがなかった。地下に伏流していた名前が、湧き水となって地表へ出たのだ。

百年近く生きたお祖母ちゃんの、さらにゆっくりと穏やかになっていた生涯の、最後の日々のことだった。初めのうち、私はお祖母ちゃんの口にする言葉の端ばしにギー兄さんという名前を聞きとるたび、古めかしい言い方になるけれど、彼女が十年前に非業の死をとげたギー兄さんを追憶しているのだと思っていた。そのようにして、気にとめずやり過していたのだ。ところがある日、お祖母ちゃんは、あいかわらず夢見ているような表情ながら、――農場のギー兄さんを呼びにいってもらいましょうな！　といって、私がその確かな意味を了解するまで、そちらだけ見える片眼をそらさなかった。お祖母ちゃんが死んだ人の幻覚に寄りそっているのでないことはあきらかだ。黄泉の国へ？　と軽口で応じることもできない。農場の、とあの人の居場所を指定して

いるのだから。
しかし私は農場まで出かける必要がなかった。あの人は、お祖母ちゃんの口から発せられた呼び名に感応したように、「屋敷」近くで待機していたから。長屋門を出たところで、あの人は、テン窪への道が坂になって谷川を離れる高みから引いた水路の石橋にしゃがんで、淡い夕闇に湧く羽虫をアメノウオが追う様子を見つめていた。松山や宇和島からはもとより、最近は瀬戸大橋を渡って本州からも、渓流釣りのアマチュアが来る。かれらが一日がかりであげる数を、夕まずめに私は鞭ほどの長さの竿でやすやすと釣る。この水路も、さきのギー兄さんが拓いたものだ。
――お祖母ちゃんが、あなたを呼んで来るようにいってるわ。ギー兄さんを農場に呼びに行くようにといって。つまりそれは、お祖母ちゃんにとって、あなたのことなのよ。
立ちあがりながら、あの人は無防備でいるところを一撃された表情をあらわした。
――ギー兄さんを呼んで来るように、とわざわざオーバーがいわれるのなら、……なにか新しいことを話されるのか、聞こうとされるか、そういうことなんだろうなあ。
あの人は、憐れなほど幼児めいた口ごもり方だった。
――お祖母ちゃんがどういうつもりであなたのことをギー兄さんと呼ぶのかわからないけれど、そうするだけの考えはあってのことじゃないの？　それでも、あなたを困らせる質問はしないと思うわ。いつまでも真面目な人だけれど、もうこの谷間と「在」でなにが行われるかにこだわっているようではないから。
水音がした。唇の端から羽虫をのぞかせたアメノウオが、一瞬宙にとどまった後、跳ねあがった時ほどの飛沫もたてず暗い流れに戻っていた。水のなかの青草の、濃くひんやりした匂いが漂

った。

お祖母ちゃんが、こちら側から向こう側に移られる際にも、羽虫のようにかすめ過ぎようとした自分の魂をとらえなおして、唇にくわえこんだ澄まし顔が、時と空間のそれぞれに滲みあうところで見えるのか？　私は急にやって来た寂しさにうなだれて、長屋門の下の湿った暗がりを潜りぬけ、そこだけわずかに光をとどめている敷石道を先に立っていた。

――オーバーは、サッチャンになにをいわれたの？　私を呼んで来いと、ある決意をして言いだされたのなら、ずっと一緒のサッチャンにこそ、はっきりしたことを示されたんじゃないの？

――私はお祖母ちゃんの衰弱を感じてきただけで、とくに私に向けての信号が発せられているとは思わなかったわ。お祖母ちゃんがいまあなたのことをギー兄さんと呼んでいるのが、一番あざやかな信号じゃないの？

私が不機嫌だったのは、あの人が沈みこんでいながら、なにか浮足だっているように感じられたからだ。お祖母ちゃんの私への言葉がどうだったとしても、いま大切なのは自分自身への問いかけではないかと……　いまになって見れば確かに、この土地にはあの人をギー兄さんの後継者としてあつかう、本気とも冗談ともつかない見方が出て来ていたのだ。そうした動きに距離をおいてきたお祖母ちゃんが、自分からあの人をギー兄さんと呼んでいる。そして何ごとか話しかけようとしているのだった。私には不安なような期待があったと思う。

そのせいもあって、いったんあの人のいうことをそっけなく受け流してしまうと、もうひとつかえって色濃く思い出されるお祖母ちゃんの言葉があるのだった。そこで私は、磨り減っている敷石に気をとられる様子で、夏の初めらしくもなく鼻を啜りあげているあの人を振りかえり、フ

ェアでないことをしている気持になった。一週間前、お祖母ちゃんはこういう言葉を発していた。元気だった時のお祖母ちゃんを思わせる、確信のこもった穏やかさの、しかも身も蓋もない直截さの。秋までには「屋敷」から葬式を出すことになりますよ、サッチャン。また、今朝の食事を前にしての、やはり近頃にない気力と体力を感じさせるものだった、ハキハキとした言葉。

——もう幾年前になるか、総領事が谷間に戻られた折は、サッチャンはいい若い者で、盛んに森へ登るお伴をされましたなあ。それがいまは娘の恰好であるから、総領事が来られたら驚かれるでしょうよ！

——偽悪的なくらい気のきいたことをいう人だから、お前、半陰陽だったのか、とか挨拶されると思うわ。

——総領事は、自分の子供がどれだけあなたの世話になっても、それはまた自分とは別、という人ですものな。頭が良いことは当然にしても、観察する眼の確かな、心の細やかな人なのやが！

私はいつもあの人が出入りしてきた裏庭の勝手口からでなく、玄関の式台へあがってもらう心づもりでいた。鍵を開けて置いた玄関の広い土間に入ると、あの人は格別あらたまった様子でもなく、維新前の一揆でふたつに割られた自然石の靴脱ぎに、むさくるしいズック靴を脱いでいた。それでいて、式台脇から倉造りの棟を通り抜ける狭く暗い廊下では、長身の身体に似合わぬひそやかな足音をたてている。それにヒタヒタとついて来られることで、私は若い娘としての動揺を感じたほどだ。

さて私たちがお祖母ちゃんの永年のテリトリーの座敷の棟に辿り着くと、さきほどギー兄さん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

を呼んで来るようにといったお祖母ちゃんは、座敷隣りの控えの間に横たわっていたのに、起きだして身仕度していられた。彼女は元気な頃、いつもそこで硝子戸の向うに谷を隔てた斜面の段丘を見渡していられた。いまその広い廊下に、籐の寝椅子の背を起てて、麻の絣の着物にジャワ更紗の帯をしめたいでたちで、丸い頭をもたげている。その恰好は、優しいイタチのようだ。

あの人には、座敷の敷物の上のマホガニーの肱掛椅子に坐ってもらった。そこでさきのギー兄さんは、製図用の画板を膝に置いて、この土地の若い人たちの生活を改革する根拠地の運動のために、農地と林を改革するプランを作ったのだ。道後温泉を建てた大工の仕事だということでゴテゴテと装飾的な座敷に、お祖母ちゃんは、やはり装飾としていまはこの椅子を据えているのではないか？　私はお祖母ちゃんとあの人を二等辺三角形の底辺両端に見ることのできる位置に坐った。

お祖母ちゃんは、初め、待ち望んでいた相手を迎えた様子ではあるのだが、薄茶色に曇りのつけてある銀縁の眼鏡の向こうの、翳った水たまりのような眼を、肱掛椅子のあの人に向けて黙ったままだった。そこで私が報告者のものいいとなった。それも私は、先ほどのお祖母ちゃんとの会話の続きとしてではあるけれど、いつの間にかあの人の新しい呼び名をもちいていたのだった。

――ギー兄さんは水路の石橋のところまで来ていられました。

――それはようございましたが！　もう私はわずかな間しか生きておらんようや、と谷間でも「在」でも、皆さんが噂をしておられるのでしょうな。それでギー兄さんも心にかけておってくださったのでしょう？　私はな、かってないほどに身体も心も衰えましたのでな、いまのうちにギー兄さんに会いに来てくださるよう願いましたが！

このようにして話し合いは始まった。年をとった人の話しぶりには、しばしば自分の耳で聞くことが主眼で、話し相手のことはおかまいなしに同じ話を繰り返すところがあるのではないだろうか？　ところがお祖母ちゃんは、百歳に近くなって口を開くことこそ稀になっているが、いったん話すとなると、じっくり問題点を考えぬいて筋みちだてて展開する。新しいギー兄さんに向けてお祖母ちゃんの準備していた話のかたまりは、さらに確かなものである様子なのだった。

――ギー兄さんは土地につたわった話をな、この年寄りから長いこと聞いてくださいました。農場もそこに繋いで進めてくださっておるように思いますが！　土地の人間から様ざまに性悪な仕打ちを受けられたのにな、あわせて魂のことをやってこられた。ここに来られた時、そういわれたとおりですな！　私の知っておったお坊さんらはな、みな中途半端に悟ったり、あきらめてしもうたりしましたよ。ところがギー兄さんはそうではありませなんだな。その年齢で、五年間も、大変なことやったでしょうが！　あなたのことを土地の人間の噂のなかで見聞きしておりますとな、Kちゃんらにいわれて私があなたを受け入れたことが、良かったのかどうか疑われる気もしました。私が受け皿を作ることをせんかったなら、勢いでここへ来られたとしても、気持がおさまれば、もっとふさわしい土地へ移って行かれたのじゃなかったか。あなたにしてみれば、ここに住みつかねばならぬ責任とてはなかったのやから。

――住む場所をあたえていただいたし、そこに農場まで準備して、自活することができるようにしていただいたのですから。私に責任も生じていると思います。それにあわせて、こちらへ来てすぐの二年間は、オーバーに特別な教育をしていただきました。それで今年の初めの頃からずっと惧れてきたように思います。あの期間に教わったことを自分のなかで確かなものにして、オ

ーバーに本当に大切なことを問いかけられたなら、答えねばならないのに、……その準備ができていないので……

――いえ、いえ、私が生きておりますのもな、わずかな時やと思いますからな、向こう側の秘密というようなことをあかしてくださいとギー兄さんに願う気持はもうありませんが！　すぐにも死んでゆく者であるのやから、そうしたことは不必要やないですか？　逆に聞えるかも知れませんが……　むしろ私はな、ギー兄さんに新しい答えがあるならば、これからもこの土地で生きてゆかねばならん若い人らに、話してやっていただきたいものですが！　現にいま、ギー兄さんの農場に通う人数は二十人をくだらぬというのでしょう？　この土地全体から若い人らが少のうなっておるのやのに……　そういう人らのためにこそな、この土地の言いつたえをよう知っておって、あわせて魂のことに集中される人がおられるのは心強いですよ。私はそれにこそ力づけられて向こう側へ行くのやとも思うておりますが！

お祖母ちゃんは、ギー兄さんのさきの言葉から、この人が自分のどのような問いかけを惧れているのかをすぐさま見抜いたのだ。その上で、ギー兄さんの心のしこりをほぐすためのように、ことさら穏やかな話しぶりなのだった。

大きい頭を前へかたむけて、お祖母ちゃんのいうことに聞きいるギー兄さんの、初めてかれがこの土地に現われた日から懐かしい人に似ていると思い、そしてそれが誰か個人の印象と結んで、というのではないとも感じてきた顔に、ポカンとした表情があらわれた。それもいくらか疑わしさを残して弛緩する様子が、むしろ愚かしく見えたほどだ。お祖母ちゃんも私と同じことを考えられたのではないか？　そのギー兄さんから眼をそむけて、屋敷の下手に流れてゆく水路の方へ、

こちらはいかにも小さな頭をかたむけられるふうだった。間近では暗い溝に見えた水路が、座敷からは、さらに昏れてきた大気の底で、光沢のある紙を切って張ったような白さだった。石橋にしゃがんでいたギー兄さんを、お祖母ちゃんは手洗いの行き帰りに見つけ出していられたのかも知れない。お祖母ちゃんの皺としみですっかり覆われている――そのこと自体に徹底したものの美しさもある――横顔に、不機嫌さの気配が滲むのを見るように思った。お祖母ちゃんは死をひかえて向こう側について話したいと思っていたのに、ギー兄さんの最初の応答から、それをすみやかに断念したかとも思われたのだ。

しかしあらためてこちらを向いたお祖母ちゃんは、むしろいさぎよい表情で嗄れ始めた声を励ましていた。

――ギー兄さん、私が今日ここへ来ていただいたのはな、まだこちら側におる私のためにな、それもサッチャンのすることに手助けをしてもらおうと願うてでしたが！　サッチャンはしっかりした娘であるけれども、男尊女卑の気風の残る土地で、この人ひとりでは、なにかとやってゆくことの難かしいことが出てくるやろうと思います。サッチャンの身の上には、普通でないことが起ったのでもありますしな！　そこでこの人を助けてくださるように、あなたにお願いしておきたいと思うたのでしたが！

私が、癌を病んでおることは知っておられましょう？　大腸の癌に始まって、その手術は私の年齢の者にはめずらしいほど成功したということでしたが、じつはその際にな、若い折のリューマチがそうであったように、身体のあちらこちらへと、癌は飛び火しておりました。赤十字の先生はな、この谷間の岡田医師にだけ秘密をあかされたつもりでしたろう。けれども岡田先生は、

そうした隠しごとのできる人やありませんものな！　私は自分の脳がおかしくならんうちに、肺の方からのあれで死ねたらな、と念じておりますが！

その上で気懸りなのがな、「屋敷」で死んでゆけるかどうか、ということで……　も一度、病院へ入ることは、免れたいと願うておりますよ。岡田医師から麻酔薬を出していただいておりますから、最後はそれに頼ることもして、なんとか「屋敷」で死にたいと思います。ところがこの「屋敷」はな、よそのお宅からこそ離れておるけれども、谷の向いには道が通じておるのやから、年寄りの苦しむ声は聞えますが！　そこを通る子供らを脅やかすのが不都合や、と言い出す人らはおるはずですよ。

そのむね、サッチャンには折にふれて希望をつたえてありますが、娘ひとりの力で「在」の古株連中に立ちむかうことは容易でないでしょう。それでギー兄さんに助力をいただいてな、私が「屋敷」から出るのは葬式の時、と徹底してもらいたいのですが！

そう言い終えると、下顎をパタリと覆うように上顎を閉じたお祖母ちゃんは、それ自体で話したことを追認する苦しげな咳をしていた。その咳の力に雑ぎ倒される具合に、お祖母ちゃんの身体は籐椅子にそって伸びもした。重さもなにもなくなったような頭から胸まで、つつましくまっすぐにして、喉をヒューヒュー鳴らしているのだった。

――それではお祖母ちゃん、今日のところはお終いにしましょう。これからいつでもギー兄さんには来ていただけるから。

お祖母ちゃんは頷こうとしたが、痩せた首の脇があらためて皺になるだけで、頭を動かすことはできないのだった。ギー兄さんはお祖母ちゃんの疲れように打ちのめされていた。あわてふた

めいて立ち上ると、黙ったままお辞儀をして退出しようとした。私もすぐそれに従って、送りに出たのだ。

この日、どういうはずみだったか、私は靴下のまま、式台の前の小石を埋めて磨いたような三和土にギー兄さんと一緒に降りていた。ギー兄さんは長身の胸もとを私に圧しつけるほど近ぢかとこちらを覗き込み、おおぶりのアンズのような眼に涙をたたえて、

――オーバーのいわれることは恐しいねえ、サッチャンは転移のことも知っていたの？　といった。大変なことになってしまったねえ。新参者の私が、サッチャンを支えて、この土地の有力者に対抗できるものかどうか……　どういう顔ぶれかは予測つかないけれど、かれらが揃って談判にやってくるんだろうなあ……　その時が来れば……

――もうその時は来ているわ。私はお祖母ちゃんを病院へ奪い去られぬよう戦うつもりよ。

私は、心底から、戦う決意をしていたと思う。しかしギー兄さんにそういった時、戦いの実際がどういうものであり、どのように続くものであるかを想像する力はなかったのだ。ただ、自分は戦うといった時、いつまでも温気の瀰漫している初夏の夕暮だったのに、身体の芯に悪寒が走るようだった。その一部分はあきらかに恐れの予感であったけれど、なお私はお祖母ちゃんを死のまぎわまで看とることが、どのように苦しい営みであるかを知ってはいなかったのだ。それが始ってみると、実際にはなかった谷間や「在」の有力者との戦いが仮に持ち上っていたとしても、それ自体はたいしたことでなかったはず、と感じられた。

お祖母ちゃんの苦しみの過程で、ギー兄さんが、作者も作品の名も思い出せないのだが、こう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com